

# 文化と宗教

## —キリスト教と神道—

平 出 昌 嗣

千葉大学・教育学部

### Culture and Religion: Christianity and Shinto

HIRAIDE Shoji

Faculty of Education, Chiba University, Japan

西洋と日本の文化の違いの背後には宗教の違いがある。キリスト教と神道の主な違いは、一神教と多神教、神・人間・自然という序列と自然・神・人間という序列、理性・秩序を重んじる男性原理と生命・豊穡を重んじる女性原理の違いであり、それは自己肯定的な西洋人と自己否定的な日本人の態度につながる。倫理観においても、西洋の罪の文化に対し、日本は恥の文化と言われるが、日本人は恥やケガレを持つことで共同体から疎外されることを恐れ、西洋人は罪を犯すことで神から見放されることを恐れる。こうした人生観および宗教観の根底には、指導者への忠誠に価値を見る遊牧生活と土地への定着に価値を見る稲作生活の違いがある。

There is a difference of religion behind cultural differences between Japan and the West. Some of the main differences between Christianity and Shinto are monotheism and polytheism, the god-man-nature hierarchy and the nature-god-man hierarchy, the male principle based on reason and order and the female principle based on life and fertility, which lead to the self-assertive attitude of Westerners and the self-negating attitude of the Japanese. In point of ethics, as it is said that Japan has a "shame culture" and the West a "sin culture", the Japanese fear most of all to be estranged from society by putting on shame or dirt, while Westerners fear to be deserted by God through committing a sin. At the bottom of these ideas lie the nomadic life that values obedience to a leader and the rice-farming life that values settlement on the earth respectively.

キーワード：文化 (Culture) 宗教 (Religion) 西洋 (the West) 日本 (Japan)

#### (1)

文化の違いは、宗教の違いと結び付く。宗教は人々を支える精神的な土台として、その文化の価値観の象徴となるものである。日本の宗教と言えば仏教ということになっているが、それは本来の仏教というよりは、日本風に変えられた仏教である。例えばお盆に先祖の霊が戻るという発想は、仏教の輪廻転生の考えに従うものではなく、山などに住む先祖の霊が定期的に子孫の家へ戻って会食をするという日本土着の信仰に基づく。そして日本土着の信仰とは、広い意味で神道と呼ばれるものである。ただしそれは、記紀神話や天皇崇拝に基づく政治的、体系的なものに限定されない。天皇を神の子孫と位置づけた体系的な神道は、後の時代に宮廷によってまとめられた狭義の神道であり、それ以前に、先祖崇拝を中心にして、あらゆるものに神を見る、素朴でアニミズム的な信仰が広く行なわれていた。人間の住む世界はまた神々の住む世界であり、山も森も川も、周りのすべてが、大いなる力と生命と神秘を持ったものとして畏れられ、敬われ、祭られていたのである。今の日本人でさえ、神道の明確な教義や形態を知らなくても、あるいは信仰する特定の宗教を持たなくても、漠然とどこかに神様がいらっしゃると思っている。少なくともお盆にはご先祖様をお迎えして

いるつもりでいるし、初詣に行けば、神様というものが本当にどこかにいそうな気がして、神妙な心で祈ったりお賽銭を投げたりする。その神様とは、古代の人が万物の中に見ていた神であり、現代人といえども、広い意味での神道を受け継いでいるのである。

一方、西洋の宗教は、ヨーロッパ南部のラテン系の国々 (イタリア、フランス、スペインなど) はカトリック中心、西部のゲルマン系の国 (イギリス、ドイツ、オランダなど) とアメリカはプロテスタント中心、また東部のスラブ系の国 (ポーランド、ルーマニア、ブルガリアなど) はギリシャ正教中心という違いがあるとはいえ、基本的にキリスト教である。キリスト教以前に、古代ギリシャ・ローマや、ケルト、ゲルマン民族などの諸宗教がありはした。しかしキリスト教がローマ帝国の国家宗教となり、帝国の拡大と共にヨーロッパ全土に広がるにつれて、それ以前の宗教は異教として周辺に追いやられた。キリスト教が他の宗教と妥協しない、厳しく排他的な教義を持っていたからである。もっとも、ギリシャ神話などの古い宗教は、異教として追いやられても、その生命重視の価値観の故に、キリスト教の禁欲的、生命否定的な要素が強くなったとき、マグマのように地下から噴き出してきては、ルネサンスやロマン主義やモダニズムといった革新的な文化を生み出した。例えばルネサン

スは、中世の長い教会支配の中から噴き出した古代ギリシャの人間中心の価値観であり、神の目ではなく、人間の目に中心を置いて、中世では不可能だったさまざまな学問や芸術を生み出すことになる。このように古い土着の信仰も、消滅することなく大地と共に生き続け、西洋の歴史を作る重要な要素となるが、しかし教会が制度として社会を支えているように、大きな流れはあくまでキリスト教である。マックス・ウェーバーによると、現代社会を特徴づける資本主義でさえ、その物質主義的な側面にもかかわらず、その合理主義はプロテスタンティズムの倫理観、つまり職業を神からの使命と見、禁欲と勤勉を重視する精神を土台にしているという。キリスト教は西洋文明の生命であり、その精神が歴史を押し進めるのである。

神道とキリスト教の一番大きな違いは、神道は多神教であり、キリスト教は一神教であるという点にある。キリスト教においては、世界は、人間も含め、神という唯一絶対の存在者によって創造され、すべては、その神を絶対的な中心に置いて秩序づけられている。だからはっきりとした思想と価値観があり、それ以外の思想や宗教はすべて異端として排斥される。一方、古代の日本人にとっては、人間の力を越えたものは、山でも川でも、木でも岩でも、風でも雨でも、また死者の霊でさえ、すべてが神となった（本来はカミという音声。「神」は漢語の当て字）。例えば雷も本来は「神鳴り」であり、狼も「大神」である。そこには中心となる絶対者もいなければ明確な秩序もなく、当然のことながら教義も神殿も神像もなかった。それらが具体的な形を取るのには、仏教が入ってきて自己を意識するようになってからである。西洋人があきれられる日本人の特徴として、赤ちゃんが生まれたら神社でお宮参りをし、結婚するときは教会で式を挙げ、死んだらお寺で葬儀をするというように、どんな宗教も無差別に受け入れるということがある。しかしそれは節操がないということではなく、古代から続く多神教の精神を受け継いでいるからであろう。神道は八百よろずの神々の世界であるから、そこに外国の神や仏が付け加わろうが、それが支配的で排他的なものにならない限りは、いっこうに頓着しないのである。

この二つの宗教は、神と自然と人間との関係がはっきりと異なる。『日本書紀』によると、最初の神・国常立尊は、開け始めた天地から葦の芽のように生まれてきた神様である。つまり草や生き物と同様、自然が神の母である。人間の住む世界の誕生については、男神イザナギと女神イザナミが人間のように交わって、まず日本の八つの島を生み、ついで海、川、山、木、草といった地上の神々を、その後には日の神、月の神という天の神と、スサノオという暴風の神を生み出した。このように、天のものも地のものも、森羅万象のすべては命を持った神々であった。人間の誕生については明確に述べられてはならず、その存在というのは、大地から草のように生み出された小さなものにすぎない。つまり、人間とは決して中心的な存在ではなく、神々の周辺にいて、神々を畏れ、祭る、弱くて従属的な存在にすぎない。一方、キリスト教では、万物は唯一にして絶対の神によって創造されたものであり、自然も神ではなく、神によって造られた被

造物になる。そして最初の人間であるアダムは、創造の最後の日に、神の姿に似せて造られ、魂を吹き込まれて、「地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」（創世記1.28）と、自然を支配することを許された特権的な地位を有する。つまり人間とは神の愛し子である。だから、神、次いで人間、次いで自然というはっきりした序列がある。

神道とキリスト教におけるこの人間の位置の相違は、自己否定的な日本人と自己主張的な西洋人の態度にそのままつながる。というのも、西洋人にとって、人間は神に似た、特権を持つ強い存在であるが、日本人にとっては草にも似た、小さく弱い存在にすぎないから。なるほど、アダムとイブは神に背き、罪を犯し、神の怒りをもって楽園を追われはした。しかしそれは二人が知恵の木の実を食べ、神のごとくになったからでもある。ミルトンの『失樂園』は、「世界が、——そうだ、安住の地を求め選ぶべき世界が、今や彼らの眼前に広々と横たわっていた」（12.646-7）という文で終わる。そこには、エデンを追われても、独り立ちした自由な旅人として、これから新しい世界を切り開いていくのだという前向きのヴィジョンがある。一方、小さく弱い日本人は、ひたすら神を恐れ、うやまうが、それは追放と放浪を強いられず、神に守られた土地に安心して暮らし続けることができるということでもある。大地は米を母乳のごとく豊かに生み出してくれるから、土地にしっかりと根づき、定着することに価値を見てきた。従って自然は、日本人にとっては、人間を越えた大きな力と生命を持つものとして、常に畏敬の対象である。自然には、山にも川にも森にも神が宿るから、自分本位に手を加えられない。それは神への挑戦であり、どんなたたきを受けるか分からない。だから現在でも、家を建てる時は土地の神を祭って地鎮祭を行なうのが恒例である。しかし西洋人にとっては自然は支配すべき対象であり、手を加えて自分の好きなように利用することができる。というのも、自然とは造られたものであり、「地を従える」ことが、神から与えられた使命であったから。動物に関しても、キリスト教では魂を持つのは人間だけで、動物は命はあっても魂は持たないから、人は動物を自分の利益のために支配・管理し、殺して食べることもできる。しかし日本人にとっては動物にも人間と同様の魂が宿っており、しかも仏教では輪廻転生の思想から殺生を禁じたため、手足や毛のない魚は食しても、獣を食べる習慣は、西洋の肉食文化が入る明治までは庶民に根づくことはなかった。

この考え方の背後には、各々の宗教が生まれた風土の違いが潜む。日本は自然の豊かな国であり、大地は、稲を初めとして、人間が食せるさまざまな穀物・野菜・生き物を生み出してくれるとともに、また台風や噴火や地震など、人や村を滅ぼす凄まじい破壊力も持っていた。それは人間が征服したり支配したりできるものでは到底なく、大いなる神として、人間が恐れ、鎮め、祭るべき対象であった。一方キリスト教は、元々はユダヤ教として、砂漠地帯の遊牧民から生まれたものである。そこでは自然は、暴威を振るうどころか、力を失い、生命の枯渇した死の世界としてあり、人間を襲う脅威とはならない。脅威となるのは他民族であり、自分たちが持つ家畜

などの財産を彼らの襲撃から守らなければならなかった。従って神とは、自然の力の化身ではなく、部族を守り導く父の父、王の王であって、いわば部族の魂そのものの化身であった。だから神は、部族の民に対して無関心になりえず、旧約では、「ねたむ神」(出エジプト記34.14)として、背こうとする民を法と罰によって支配しようとし、新約では「愛の神」(ヨハネの手紙 第一4.8)となって、その独り子キリストが、法と罰ではなく、愛と許しによって支配しようとする。どちらにしても、神は父の父であるから、人格を持ち、言葉を持ち、意志を持って、神の民としての人類に臨むのである。

従ってキリスト教では、神、キリスト、十二使徒、また司祭・牧師でも、羊飼いはあるいは指導者としての父権的な役割が何よりも重要であり、母あるいは女性的なものは抑圧されて目立った形では現れない。なるほど、父権的な旧約の神に対し、キリストはその愛の精神において女性的側面を持つが、しかしキリストは父なる神の息子であり、男性重視、言葉重視、理性重視の価値観は変わらない。それは、ギリシャ神話のように女性原理との調和の上に成り立つのではなく、その完全な否定の上に成り立つものである。女性原理とは、感情、肉体、生命、混沌であり、それは理性と秩序という男性原理を乱し、脅かすものとして、悪の色合いを帯び、抑圧されなければならないものである。今でもカトリック教会では女性は司祭にはなれず、プロテスタントでも女性が牧師になれるようになったのはそう遠い昔のことではない。女性原理への敵意として典型的なのは13世紀から17世紀にかけて行われた魔女狩りで、他の宗教なら女祭司や巫女になったような霊的能力を持つ女性は、キリスト教では悪魔に通じた魔女とみなされ、おびただしい数の女性が情け容赦もなく処刑された。こうした敵視は、神が天地を創造したという考えにすでに暗示されている。神道では、最初の神(男神)は自然から生み出された。自然とは神を生んだ母であった。しかしそれは自然への神の従属を意味するから、キリスト教ではその関係が逆転し、神が自然を創り出し、支配下に置くのである。もっともカトリック教会では、キリストを産んだマリアが、聖母(the Blessed Virgin)として篤く崇敬されている。しかしマリアは人間だから、父なる神の妻とはなりえない。しかもマリア信仰は、父子神信仰とは対立する、異教的な母子神信仰、あるいは地母神信仰を引き継いでいるから、プロテスタントではマリアは特別視されず、ただキリストの母として位置づけられるだけである。

一方、神道では、天上界は女性である天照大神に支配されており、その子孫が稲種を持って天下り、天皇の始祖となる。つまり女性が太陽なのである。西洋の神話では、太陽は基本的に男性である。キリスト教では、太陽は神にもキリストにも喩えられるし、ギリシャ神話では、太陽神はアポロンあるいはヘリオスという男神であり、天を支配する最高神ゼウスも、その語源は「輝き」で太陽を暗示する(ただし、北欧神話では太陽を引く馬車の御者ソルは女性になるが——だからドイツ語では太陽は女性名詞——彼女はあくまで御者であり、天照大神ほどの中心的存在ではない。同じソルでも、ローマ神話では男性の太陽神になり、フランス語・イタリア語では太陽

は男性名詞である)。この違いは、日本が本来、女性、あるいは女性原理によって支配される社会であることを示唆する。古代の日本で、卑弥呼という巫女が女王として邪馬台国を平和に統治していたということは象徴的である。卑弥呼とは、山本七平の言うように、「日の御子」または「日巫子」という称号であったのかもしれない(『日本人とは何か』上40)。女性を太陽とするこの発想は、日本が稲作民族として、自然に大きく依存し、自然からの恩恵を受けて生きてきたことと係わる。天照大神はしばしば仏教の大日如来と同一視されたが、大日如来のように万物を生み出す母胎としての役割を担っていたのである。キリスト教では、万物は男神によって、生み出すのではなく、作り出される。しかし神道では生殖の原理により、女神によって生み出されるのである。興味深いことに、日本でキリスト教が禁圧されていた時代、隠れキリシタンによって信仰されていたものは、神やキリストではなく、マリア観音こと聖母マリアであった。これも、日本人が本能的に母性的な神を求めていることを示すものであろう。

万物の創造において、キリスト教で重要なのは、神の言葉としてのロゴスである。ロゴスとはギリシャ語で言葉とか理性を意味する単語である。聖書の創世記に、「神は光あれと言われた。すると光があった」(1.3)と語られるように、言葉とは無から物を創り出す力である。さらに、ヨハネの福音書に、「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった」(1.1)と述べられるように、神の言葉は受肉してキリストとなり、キリストの口を通して神の言葉が人類に伝えられた。神の言葉とは、人が神の祝福を得るため、そして悪魔の手に落ちて破滅しないために、絶対に守らなければならない教えであった。つまり言葉とは、人を含め、万物を支配する根本原理なのである。この言語観が、西洋人の言語観と深く係わる。言葉は、理法として、あるいは男性原理として、人や世界を支配する力を持つ。アダムも、生き物に名前をつけることで、それらを支配下に置いた。言葉は剣であり、光であり、力であって、相手を征服し、従わせるものである。だから言葉が明確で論理的であればあるほど、それは優れた剣としての支配力を獲得することになる。

一方、神道にあるのは言霊思想である。それは言葉には霊が宿り、その霊の力で言ったことが現実になるという考え方である。いわば言葉が男なら、霊は女であり、両者が一つに交わることで、現実が生み出される。日本は八百万(やおよろず)の神の国であるから、古代にはいたるところに神や霊や魂がいた。山や谷に響くこだまも、樹木に霊が宿り、その木霊が声や音に応答すると信じられた。きつねの霊が人に取り付けば、人はきつね憑きとなり、精神錯乱を起こした。人間の生霊や死霊が人魂として浮遊することもよくあった。言霊もそんな霊の一種である。それは、神事のときの祝詞(のりと)、神仏の前で人を呪う呪詛など、呪術と係わる特別な場合にその霊力を発揮した。しかし日常生活においても、いつ霊が自分の語る言葉に取り付き、どんな所作をするか分からなかったから、それを恐れて言葉遣いには慎重になったと思われる。今日でも日本人は、「口は禍の門」

と考へて、言葉を慎み、余計なことを言わないようにしたり、冠婚葬祭の席では忌み言葉を使わないようにしたりする。例えば結婚式で「終わる」「切る」「別れる」は新婚夫婦の破局を呼び寄せることにもなりかねないから、「(会を) お開きにする」と言ったり、「(ケーキに) 入刀する」と言ったりする。悪口を言う場合も、外国語はセックスに関するものが多く、意味がはっきりしているが、日本語はワケの分からないものが多いという(金田一春彦『日本語』上263)。確かに、英語では、Fuck you!、Damn you!、Kiss my ass!、You stupid cunt!など、露骨で攻撃的だが、日本語の、おたんこなす、あんぽんたん、すっとこどっこい、などは意味不明である。そうしたことも、日本人は無意識のうちに言葉に霊がつくの恐れ、「触らぬ神に祟りなし」とした古代人の精神を引き継いでいるからなのかもしれないが、こうした言葉に対する曖昧で慎重な姿勢は、欧米人が言葉によって積極的、攻撃的に意味を作り出そうとするのとは極めて対照的である。和を重んじる日本人にとって、言葉は注意して扱わなければならないものであり、はっきり言うことで、引っ込みがつかなくなったり、人間関係がぎくしゃくしてしまうことを恐れるのである。

## (2)

宗教が違えば、倫理観も異なってくる。ルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で、西洋の「罪の文化」に対し、日本文化を「恥の文化」と規定し、「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行なうのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行なう」とした(121-22)。もちろん、どちらの文化にも恥もあれば罪もある。しかし日本人は罪を口にするより恥を口にすることがはるかに多く、また西洋人はその逆の場合の方がはるかに多い。これは単に習慣の問題ではなく、その背後に各々の宗教があるからである。すなわち、罪とは、キリスト教においては神の教えにそむく行為であり、それによって人は魂の救いにあずかれず、永遠の苦しみにさらされることになる。また恥とは、神道ではハレ(晴れ)の場に出ることのできない行為や状況であり、本来属すべき共同体から弾き出されて、独り悶々と苦しむことになる。

実際、共同体の中で生きる日本人は、自分が皆からどう見られるかを意識して生活する。いつも周りの目があるから、笑われたり、そしられたりしないよう、義理・義務を果たし、まじめに仕事をし、なるべく他人を真似て、突出した言動を避けようとする。恥をかくとは、共同体の中で、影あるいは汚れとなって浮き出ることであり、ただ自分が孤立し、疎外されるだけではなく、自分が属する家やグループなどの評価も下げってしまうから、何よりも恐れ、避けるべきことになる。ただ恥ずべきことだけではなく、たとえそれが好ましいことでも、人と違う目立つことをする者は、でしゃばりとか生意気と思われ、疎んじられやすい。皆が守っている共通のやり方に従っていないと見なされるからである。だから日本人は知らず知らず人と違って見えることを恐れ、服装でも行動でも持ち物でも、あるいはレストランでの注文でさ

えも、なるべく周りの人と同じものにしようとする。そしてこの周囲の目の意識ということから、内面的なものよりも対人的なもの、即ち、名、義理、礼、恩、和といった徳に人生の価値を見るようになる。それは「顔」、つまり外面を重視する態度であり、本音は「腹」に収めて、すべきことはきちんと果たし、人から後ろ指をさされないようにすることが、生きる上で何よりも重要なことになる。つまり個人の欲望を満たすことよりは、世間体を保つことが人生では価値あることになる。従って、身なりでも言葉でも行動でも、相手を不快にさせないような礼儀作法が重んじられる。個性を抑え、外観を整え、どこにも見苦しい部分がないように細心の注意を払うのである。挨拶に、「いただきます」、「行ってきます」、「お疲れさま」、「よろしく」といった、英語にはない決まり文句が多いのも、型の中に自分を納めるためである。また悲しいときや恥じるべきときにも笑うジャパニーズ・スマイルも、西洋人にはとうてい理解できない異様なものだが、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が「日本人の微笑」で述べているように、対人的な顔を重んじる日本人にとっては、心にある否定的な感情を隠し、人との平和で穏やかな関係を保とうとする本能的なものがある。

これは神道におけるハレという意識と係わる。ハレとは、冠婚葬祭、即ち入学式とか結婚式、正月とか祭りなど、人生の節目となる特別で正式なときのことで、植物の生長が発芽や開花や結実によって区切られるように、人間の一生もこのハレのときによって区切られる。この時は親戚や土地の人達と公に交わるばかりでなく、また神の面前に立つことにもなるから、場所も家とは別のところ、少なくとも日常生活とは仕切られたところで行われ、そこでの服装や態度も日常生活とは異なった特別なものになる。日本人にとって人生の華は、神・自分・共同体が一体となったこのハレのときにあると言ってよく、曇りのない晴れやかな心で公の場に臨むというのが、何よりも貴く誇らしいことになる。そこではケガレ(穢れ)が何よりも忌み嫌われる。ケガレを持つ者は、そのハレの場には加われず、その神聖な場から弾き出される。恥はそんなケガレの一種である。だから人は普段の生活、つまりケ(褻)のときでも、恥をかくこと、面目を失うこと、顔に泥を塗られることを恐れ、泥を塗られたら、その「汚名をそそぐ」ことを何よりも心がける。さもないと、ハレの場に顔を出せないし、人間としても失格の烙印を押され、皆からあざけりを受けることになる。西洋の善と悪に相当するものは、このハレとケガレ、「きれい」と「きたない」である。「腹黒い」、「腹ぎたない」は、日本人にとっては最も不名誉な言葉であり、心根の腐った悪人と同じ意味を持つ。悪は内心の腐敗、つまりケガレから生じるものだからである。武士の時代、切腹が持っていた一つの意味は、日本人にとって心は腹に宿っていたから、腹を割ることで内臓(真心)がきれいであることを人に見せることにあったと言われるが、そのくらいケガレを持つことを日本人は嫌ったのである。

この発想は稲作と結びつく。神・自分・共同体が一体となったハレの場とは、稲作で言えば田植えや稲刈りという特別のときに当たる。田植えは昔は村人たちが共同

で行う田の神の祭りで、田の神の見守る中、男たちは笛や太鼓ではやしたて、早乙女たちは晴れ着を着て苗を植えたというが、土地を耕したり苗を育てたりという日常の営み(ケ)は、この実りと係わる特別な日(ハレ)のためにこそあった。成人式などの人生の通過儀礼と同じで、その時を境に、まるで脱皮でもするように、形態ががらっと変わり、成長の次の段階へ移行するのである。ハレはケと対比されるとともに、ケガレとも対比される。ケガレとは稲につく病気のようなもので、少しでもどこかに付くと、それは瞬間に広まって稲を枯らし、田を全滅させてしまう。ケガレの一つの解釈は、毛枯れ(あるいは気枯れ)であり、毛(気)とは稲の穂の実りのことだから、稲の生命力を枯らすものを指す。それはどんなに小さくても、水田全体を汚染して滅ぼす力を持つため、どうしても排除しなければならない。この発想が人間の社会にも応用されて、家畜や人の死、あるいは死を暗示する血などが社会を脅かすケガレとなる。それは稲の伝染病と同じで、放っておけば村全体を汚染して全員に死をもたらすものになるから、遠ざけ、取り除かなければならない。その場合、ケガレは汚れと同じで、泥のように外から付着するものであるから、水で洗い流して取り除くことができる。みそぎ(禊)とは、身を水でそそいで汚れを取り去ること、おはらい(お祓い)とは、表面についた汚れを払って元の状態を取り戻すことである。『魏志倭人伝』に、邪馬台国では身内が死んだとき、喪に服した後に、家族は水中に入って禊を行うとあるように、古代では沐浴することで身に付いた死のケガレをすすいだ。それは今でも、葬儀の際に、墓地から戻ると水と塩で体を清める慣習として残っている。このようにケガレを取り除いてケに戻り、ケを実らせてハレを生み出す、それが日本人の人生観としてある。

一方、自我を重視する西洋人は、人の目ではなく、神の目を意識する。神の目に自分の生き方が正しいかどうかの問題なのであり、正しいと信じるなら、誰が何と言っても自分の信念を貫き、社会全体を敵にまわすことも厭わない。キリスト教では、人間は神に似せて造られ、神に愛されながら、アダムの上原罪によって墮落し、カインの弟殺しにより殺人者の血を受け継ぎ、ついにはキリストを十字架に掛けることで神殺しに手を染めた。人がその忌まわしい罪の遺伝から救われるのは、ただ、人類の罪を背負ってくれたキリストを信仰することによってのみであり、洗礼を受け、原罪から洗い清められることで、初めてその祝福を得ることができる。従って、罪を犯すとは、せっかく得た祝福を捨て、再び呪いの泥沼へ落ちることを意味する。そうならないためには、周囲がどうであろうと、自分の信念を貫く強さを持たなければならない。彼らにとっては、人と向かい合う顔ではなく、神と向かい合う自分の魂が大切なのであり、その結果、真理、正義、善、信仰といったものが人生において何よりも重要になる。

マーク・ピーターセンは、アメリカ人は、神を信じない人も含めて、「大文字で書くTruth(真)」という絶対的なものがどこかにあると思っている。そして、それは自分という人間の外に存在するものである。人間は、真面目に良心的に考えれば、Truthfulな生き方が分かり、

それに忠実に生きたい」と思っていると語る(『続日本人の英語』173)。これは、人の目を気にして恥をかかないように生きる日本人には理解の難しいことであろう。少なくとも真や誠は、人の外側ではなく、人の内側にあるもの、つまり個人の心の問題である。しかし西洋人にとっては、それは人の外側に独立してあり、かつ人を支配する絶対的なものである。Truthというこの超越的な観念は、神を信じる者にとっては神と同じである。それは物質的なもの、現世的なものを越えた永遠で絶対的な原理であり、流動する世界の背後にあって、世界を支配しているものである。そして西洋人にとっては、自分とこのTruthとの係わり合いが、人生で最も重要なものになる。Truth(神)に従う心とそれに背こうとする心の対立が、いつも人生につきまとう。Truthとは超越的な観念であるから、Truthに背こうとする心とは、自然や本能に属するものになる。従ってその葛藤は、理性と感情、魂と肉体という葛藤と同じである。本能的なものとは罪を生み出すものであり、それは理性を脅かし、魂を墮落へと誘惑するものであるから、必然的に悪の観念を帯びて、避けるべきもの、克服すべきものとなる。

この心理の根底には、遊牧民族の考え方がある。定着する土地を持たない遊牧民にとって、共同体を一つにまとめるのに重要なものは、指導者への忠誠である。それがなければ、他に共通の基盤を持たないから、共同体の秩序は簡単に壊れてしまう。つまり人は、羊飼いに従う従順な羊のようにならなければならない。もし従うことができなければ、調和を乱すものとして共同体から追放され、家族も友も財産も失って、荒れ野を孤独にさまよわなければならない。囲いから放り出された羊を待つ運命は、餓死するか、あるいは狼に食い殺されるかであるから、それを恐れて、指導者の命令には絶対的に服従しようとする。その従う心が善の心をなす。一方、悪とは、服従せず、狼になる心のことである。それは、法や倫理を持たず、また指導者も持たずに、野性の本能のままに振る舞おうとすることで、人間の心の底に潜む獣性を表している。人は、従順な羊としておとなしく暮らしていても、ある境界を踏み越えれば、狼になりえる。実際、西洋には狼への変身物語がよくある。ゼウスに人肉を捧げて狼に姿を変えられたギリシャ神話のリュカオンに始まり、聖書で七年間野獣となった王ネブカデネザル、月光を浴びて狼になる中世の狼人間の伝説や、「赤ずきんちゃん」で老婆に化けた狼など、人間はいつでも狼に変身しうる。と言うよりも、狼が人間の本性で、神への忠誠が人を柔和な羊に変える。だから信仰心を失うと、人はたちまち狼になる。狼になるとは、悪魔になるということである。狼は羊を餌食にし、すきあらば襲い掛かって羊を食い殺そうとする。だから、羊を守るためには、狼は殺さなければならない。狼になることの代償は死であり、また永遠の呪いであって、羊の囲い地にとどまっていたければ、悪にはどんなことをしてでも抵抗しなければならない。

聖書の「黙示録」やミルトンの『失樂園』では、悪魔は軍団の形を取って現れ、神の天使軍団と壮絶な戦いを繰り広げる。だから、悪とは他部族あるいは異民族という解釈が成り立つ。砂漠では、生きるために、遊牧民が

他の遊牧民を襲い、その財産を強奪したり、人々を殺戮したりすることはまれではなかった。その残忍性において、他の部族や民族は恐ろしい悪魔になりえる。これが神話的に拡大されると、人間はおとなしい羊の群れとなり、その羊をめぐる、羊を食らおうとする悪魔＝狼軍と、羊飼（神）の率いる、羊を守ろうとする天使＝犬軍との戦いになる。しかしながら、悪魔は全くの外の存在というより、元は神のしもべで、しかも悪魔の長サタンは、かつてはルシファ（明けの明星）と呼ばれた高位の天使であった。だから部族内部での権力争いに敗れ、追放された側が、煮えたぎるような憎しみと恨みを抱いて、権力者の財産である羊を奪おうとする形になる。それは外への逃げ場のない閉じられた世界であり、戦いはどちらかが息絶えるまで続けられることになる。日本で悪魔に相当するものといえば、鬼であろう。鬼は人を食い殺す凶悪な怪物であり、恐怖の対象であるが、しかし西洋の悪魔と違い、神とは必ずしも対立しないし、時には人間の味方になってよい行いもする。しかも鬼が島のような自分の領土を持っていて、めったなことでは人間の領域に侵入してこない。つまり人間にとって外の存在であり、従って自然の荒々しい力とも解釈できるし、山賊や異民族など、社会の外の集団とも解釈できる。その点、人間の内的獣性の具現者としてある悪魔とは質的に異なる。

この世界観・人間観が、人間の精神に写し取られる。フロイトは人間の精神構造を、スーパーエゴ（超自我）—エゴ（自我）—イドという三つの体系として示した。スーパーエゴとは、幼児期、両親によって植え込まれた、禁止や理想を表す無意識的な倫理観念である。それは独立した絶対的な価値観を持ち、命令を発して、意識的存在としてのエゴをそれに従わせようとする。イドとは無意識の本能的衝動、特に性的欲望であり、それ自体はひたすら快楽を追求する原始的で非社会的な力だから、エゴによって、現実やスーパーエゴの規制に合った形に変えられなければならない。だから簡単に言えば、下から湧き上がる性の力を、上から理性の力が押さえつけるという対立的な構図を取る。これを神話的に表現すれば、神—人間—悪魔という構図になる。エディプス・コンプレックスの観点からは、下から湧き上がる母への愛情を、父への恐怖（去勢不安）が押さえつけるという形になる。いずれにしても、イドから湧き出してくる性的エネルギー（リビドー）は、そのままでは悪と罪しかもたらさないから、その噴出を抑圧し、スーパーエゴが是認する形へと変形・昇華させなければならない。性の力、肉体的力、自然の力とは、西洋人にとってはそのままでは悪であり、それを理性や精神の力でいかに昇華し、克服するかが、人の強さと価値を決めることになる。

日本人の場合は西洋人ほど個人は絶対化されず、むしろ共同体との係わりが強いから、村—自己—身体（あるいは、顔—自己—腹）という空間的図式の方が捉えやす

い。人の意識を規制するのは自分が属する共同体の和の倫理、特に義理であるが、スーパーエゴが心から切り離せないのに対して、日本人の倫理観は、旅の恥はかき捨てという諺があるように、その社会を離れてしまえば、心から取り除かれうる。こちらを見る人の目がなくなり、義理などの社会的拘束も消えて、自分の「顔」を意識する必要がなくなるからである。その時、人は解放されて、身体あるいは「腹」の欲望のなすがままになるが、しかしそれは罪悪感を伴うものではない。それはむしろ公の場では抑えられていた身体的願望の充足であり、生命の回復である。ベネディクトは、「日本人は自己の欲望の満足は罪悪とは考えない。彼らはピューリタンではない。彼らは肉体的快楽をよいもの、涵養に値するものと考えている。快楽は追求され尊重される」(101) と言う。ピューリタンにとって、肉体は悪であり、その欲望は罪を生む。とりわけ性的欲望は精神の自由を拘束するものであり、禁欲と自制が求められた。しかし日本人にとっては、肉体的に満たされれば心も満たされ、魂は新しい活力を得ることができる。性欲も、それ自体に悪の観念は伴わない。それは子孫の誕生や作物の豊作など、大地の生命原理に係わるものだから、むしろ貴く神聖なものであり、神社によっては性器をご神体として祭るところもある。このような公の性の賛美は、肉体を否定してひたすら魂の救いを求めるキリスト教の社会ではどうも考えられないことである（ただし、異教であるギリシャ・ローマ神話では性の力は神格化されて、ヴィーナス、アフロディーテ、ディオニュソス、バックスといった神々になる）。また日本人には、ただ体を洗うだけの西洋人と違い、耽溺とも言える風呂の愛好があるが、これもまた、風呂桶にどっぷりと浸る形が子宮の中の胎児にも似るように、日本人が持つ母子的一体感の願望を満たすものであろう。羊水にも似た温かい湯の中で、人は癒され、清められて、生命を回復する。身体は自然につながるものであり、そして自然とはよいもの、人間に米と活力をもたらしてくれる、母にも似た生命の源泉なのである。

## 引用文献

- マックス・ウェーバー、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、1989  
 山本七平『日本人とは何か。』上巻 PHP研究所、1989  
 金田一晴彦『日本語』新版 上 岩波新書、1988  
 ラフカディオ・ハーン「日本人の微笑」中野好夫編『小泉八雲集』筑摩書房、1970  
 マーク・ピーターセン『続日本人の英語』岩波新書、1990  
 ルース・ベネディクト、長谷川松治訳『菊と刀』日本教養全集18 角川書店、1974  
 ジョン・ミルトン、平井正穂訳『失楽園』岩波文庫、1981